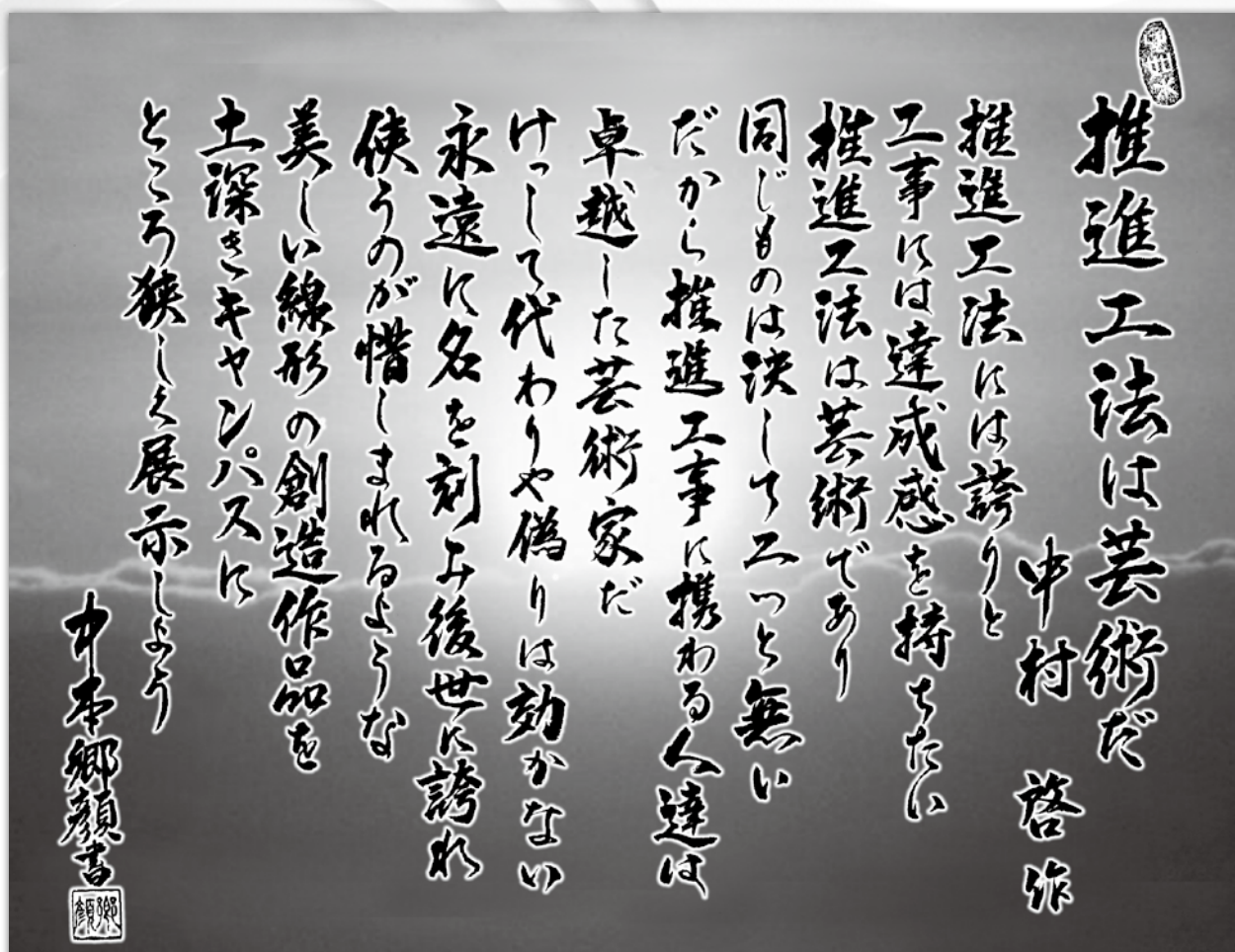


読み直してみたい印象に残る報文



この詩は、中村 啓さん（現・下水道アドバイザー、中川ヒューム管工業㈱）が、岐阜県笠松町役場（技監）時代に、本誌の2005年新年号で「推進技術の明日をよむ」というテーマで特集を組ませていただいた時、作詩され本誌の特集の企画や「俳句の頁」で創刊以来お世話になっている中本郷顔先生の書で投稿いただいたものです。創刊300号記念に、読者の皆様ともう一度「熱き想い」を味わっていただきたく、ご紹介します。

我が国の推進技術は、六十数年前、約6mの管きょ施工技術として始まり、その後、下水道整備の波に乗って、延長で1,447m、また、あらゆる土質に対応できる掘進方法を確立して、特殊工法から標準的な汎用工法として進化し

て参りました。それは、人生におけるターニングポイントのように、トラブルや新たな課題をひとつひとつ解決しながら、次なるステージを開き続けてきた証です。

これまで発行した300号に、その時々を取り組みを紹介して参りましたが、本記念号では、編集委員が選んだ「読み直してみたい印象に残る報文」を紹介させていただきます。

誌面の関係で全文紹介は1編のみとなりますが、編集委員が選んだ報文は、本誌ホームページ（<http://www.lweb.co.jp/micro-tunnelling/>）で見られることもプリントアウトすることもできます。この機会に是非目を通してみてください。

（編集室）

復刻版 Vol. 1 No. 4

日本の推進工法の原点

木村 宏一

(1928年2月18日
～2007年2月2日)



はじめに

「推進工法」と言えば、現在では都市土木の有用な施工法として、立派に認知されており、最近では「推進工法」に関する技術書も数多く出版されています。それにもかかわらず、なお特殊な専門的工法の色彩が強く更に、完成された工法ではなくて、今後も技術的開発が大いに期待され、常に「推進技術」に関連する新技術が生れているのは、この工法が本当に都市土木の一工法として活躍しだしてから、未だ日が浅いからだと思います。

さて、現在の形の「推進工法」のルーツを探してみると、これは比較的古くて第二次世界大戦後間もなくのことであり、一方この技術が、我が国独自のものであることがわかります。少なくとも「推進工法」に関する限り、その基本的な面において、如何なる時期においても今日まで、外国技術の全く入り込んでいない極めて独創的な工法技術であり、現在、国際的に極めて高い技術的水準にあることは、われわれとして大いに誇りとすべきだと思います。

さて、それではどのような経過をたどって、今日の我が国の「推進工法」が生れ育って来たのでしょうか。

記録によれば、我が国独自の推進工事は昭和23年(1948年)5月に最初の工事が施工されています。この工事のことについては後述するとして、それから約15年間、すなわち昭和30年代の終り頃までは、軌道横断工事、道路横断工事、水路横断工事等主として横断工事に利用され推進延長も、せいぜい30～40m程度のものが大部分でした。従って、現在のように道路の縦断工事に、それも1スパン100m以上の推進が行われ、下水道管渠を中心に華々しく都市土木の有用な工法として脚光を浴びるようになったのは、昭和40年代に入ってからのものであり、それも昭和40年代後半になってからのことです。従って本格的に各地で大々的な施工が行われるようになってからは、まだ20年に満たない工法だと言うことができます。しかしながら、昭和50年代に入ってから「推進工法」の進歩発展はすさまじいものがあり、まず掘進の機械化および自動化、そして推進用油圧機器の大型化、強力化による長距離推進、更には小口径管推進という管内無人化推進に関する各種工法、技術、機器の開発出現と、その普及発展はとどまるところを知らない現状であります。このように、推進工事を能率よく施工しその適用範囲を拡大する各種